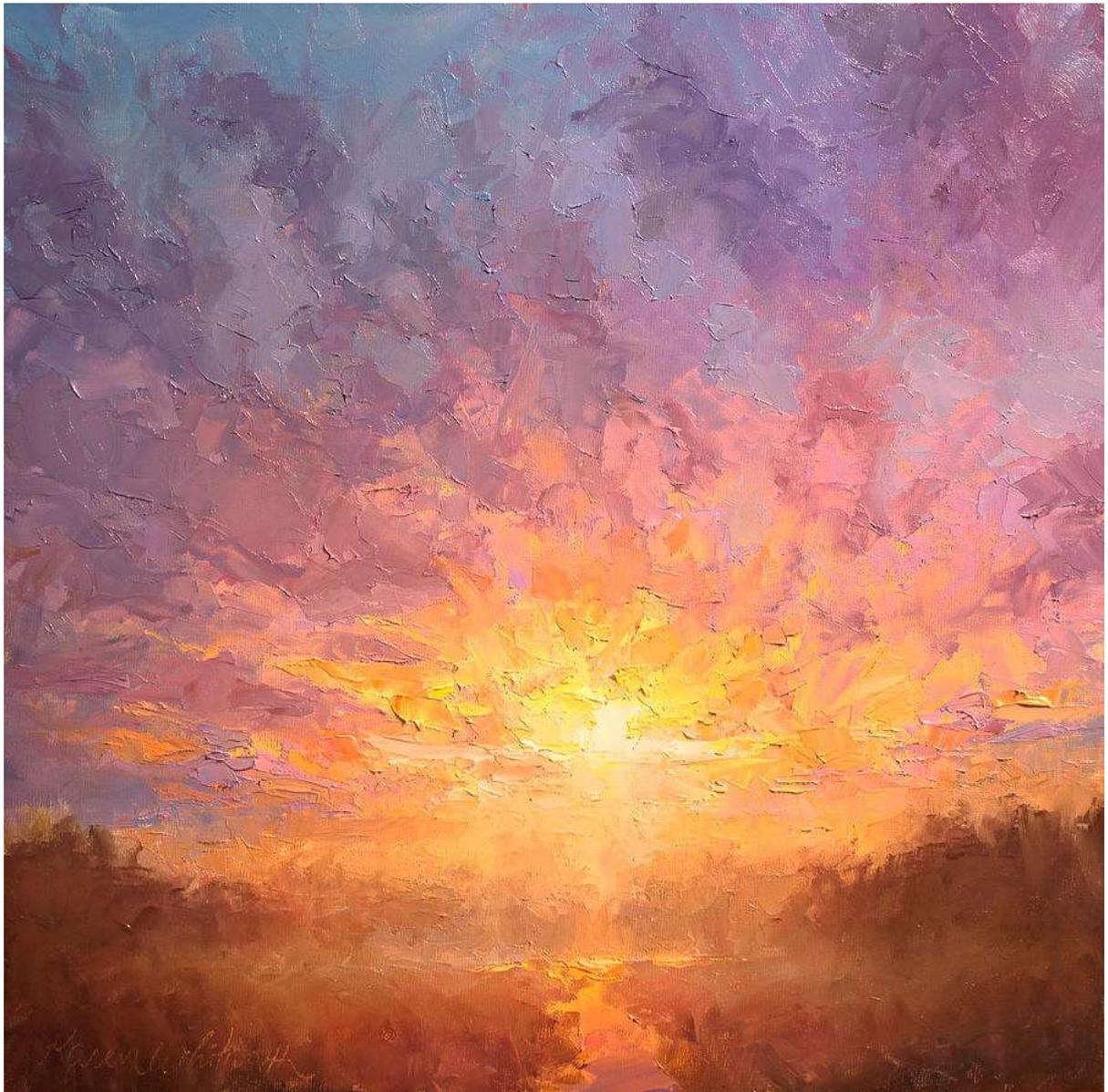

発達理論の学び舎

Back Number: Vol 147

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 2921. 魂の足跡
- 2922. 今朝の始まり
- 2923. 三冊の共著書籍と一冊の監訳書籍:魂の繋がりと受託
- 2924. 魂とパトスに共振する創造物
- 2925. 絵画作品からの作曲と平穏さ
- 2926. 芸術教育・霊性教育・美学の探究に向けて
- 2927. 人生という贈り物に対する返礼
- 2928. 探究衝動と創造衝動の渦の中で
- 2929. 仮眠中の現象と今朝方の夢
- 2930. 盲目的な夢遊病者
- 2931. 創造の泉に触れながら
- 2932. 静かな土曜日の朝とハイドン
- 2933. 北欧旅行に向けて
- 2934. 土地に根ざす作風とGRE試験対策
- 2935. ハワード・ガードナー教授の書籍から
- 2936. 奉仕のための読書と部分と全体としての作品
- 2937. 北欧旅行の順路と新たな生活リズム
- 2938. 元気な子供とGRE試験の問題からわかる思考の癖
- 2939. GRE試験対策:日本語の介在度合い
- 2940. GREの読解セクションの解法について

時刻は九時半に近づきつつある。本日最後の日記を書き留めておこうと思う。このようにして日々何かあるたびに書き綴っている日記は、自分のために書かれたものであり、自分の日々を大いに支えてくれる無くてはならないものである。この一連の日記を他者のために書こうという意識が芽生えた瞬間に、この日記の意味は無くなってしまおう。

仮に商業出版で書籍を世に送り出す時には、それは徹頭徹尾、読者を想定し、ある一定の幅を持った読者の方に読んでもらえるような文章にする必要がある。だが、ここで書かれている日記は、私という一人の人間が人間として固有の人生を生き残すためにあるものであるため、他者のために文章を書こうなどという意識を持つてはならないことが明らかになってくる。

他者を想定した瞬間に生まれる、他者に迎合するような意識を持つて文章を書いてはならない。もし仮にこの一連の日記を読み、何かしら感じるものを得てくれる人がいたとしても、それは百万人中の一人でもいい。しかもそれはこの時代の人でなくてもいい。

自分自身がどのような人間の文章に感銘を受けて今に至るかを思い出してみる必要がある。たいていの場合、その人物はすでに亡くなっており、彼らは一様に私のために文章など書いていない。

自分のために日記を書き綴っていく際にも、一つ極めて重要な条件がある。それは自らの魂を通じて文章を書き残していくということだ。ただ一点、それだけが守られていればどのような内容の文章でもいい。自らの魂を通して生み出されない文章は書くべきではないし、魂を通さずして生まれた文章は読まないようにする。これは本当に徹底したい。何となれば人は自らの魂を欺き、死んだ文章しか書かないし、死んだ文章しか読まないからだ。

自らの魂が入り込む度合いが少ない日記を書くこともあるかもしれない。だがそうだとすると、必ず魂の躍動の痕跡をそこに残したい。

今日読んだ書籍、そして明日以降に読む書籍の中には、すでにこの世を去った人たちが魂を込めて書いたものが数多くあるだろう。それらの書籍を読むとき、その文章の書き手は確かに自分の中に生きている。これが魂を通じて形に残すことの最大の意味と意義だと思うのだ。魂の不滅性という

のはまさにこれと関係している。これまでも何度も書き留めてきたが、私たちの肉体は間違いなくいつか朽ち果てる。だが、魂はそうではない。魂が宿ったものを形としてこの世界に残せば残すほどに、魂の不滅性はより強固なものになっていくのではないかと思う。

時刻は午後の九時半を迎え、辺りが薄暗くなってきた。ここ最近、刻一刻と日の入りの時間が早くなってきている。午後の十時を迎える頃には随分と暗くなってきた。今日から八月を迎えたばかりだが、秋の足音が聞こえて来る。

欧州での三年目の日々も、常に自らの魂を通じた形で一日一日を過ごしていきたいと思う。魂を持つ人間として人間らしく生きるというのはそれに尽きるのではないかと思う。とにかく明日からも、魂の歩みを日記として、曲として、デッサンとして絶えず残していこうと思う。フローニンゲン:2018/8/1 (水)21:42

No.1191: Microcosmos in Our Intestines

My intestinal flora is dancing in a rhythmical and gorgeous way. This reality has the exterior universe, the microcosmos in our body, and the infinite universe in our mind, all of which shape fractals. This is an astonishing fact. Groningen, 08:49, Thursday, 9/6/2018

2922. 今朝の始まり

今朝は目覚めと同時に、赤く輝く朝日を拝むことができた。幾分黄色を帯びた赤く輝く太陽にしばらくの間見とれていた。

今日も一日が静かに始まったことを知る。今朝は昨日に引き続き平穏な雰囲気醸し出している。空にはほとんど雲がなく、スカイブルーの空が広がっている。いつもとは少し異なる小鳥の鳴き声がある。もしかしたら同じ種類の鳥なのかもしれないが、今日は鳴き方が違うことに気づく。

今、書斎の窓に近づき、辺りを確認してみたところ、その鳴き声を発しているらしき鳥の影を見た。だが、肝心の全容を確認することができず、それがいつもの小鳥なのかはわからなかった。いずれにせよ、今日も落ち着きのある清澄な一日が始まったことは確かだ。

時刻は午前七時に近づきつつある。起床直後に毎朝の日課であるヨガをしていると、今朝方の夢について思い出した。

夢の中で私は、逆立ちの訓練をしていた。とても広い部屋の壁際で逆立ちの練習を延々と行っていた。なかなか両腕でバランスをとることが難しく、重心が左右のどちらかに偏ってしまい、必ずどちらかの方向に身体が崩れてしまうことが続いた。再度逆立ちをしようと思うと、自分が手をつけていた地面の箇所に他人の髪の毛が落ちていることに気づいた。男性の短い髪の毛もあれば、女性の長い髪の毛もある。

どうやら彼らもここで逆立ちの練習をし、その際に髪の毛が落ちたのだと気づいた。髪の毛を避けながらもう一度地面に両手をつけ、壁際で再度逆立ちを行った。ついこうまく逆立ちができた時、視線の先を見ると、そこには大きな窓があり、その向こうに夕日に染まる美しい景色を眺めることができた。それはまるで万華鏡のように変化する景色であり、夕日の色が瞬間瞬間に変化していた。

赤紫の夕日に染まる景色の時もあれば、青紫の夕日に染まる景色の時もあった。私は逆立ちをしたままで、それらの景色に見入っていた。

本当に美しい夕焼け空と夕日に染まる美しい景色がそこにあった。その景色に見入っていると、夢の場面が静かに変わった。

次の夢の場面では、日本の歴史に関するペーパー試験と英語のスピーキングの試験を受けていた。日本の歴史に関する試験では、最初の数問が日本の歴史と絡めて朝鮮半島の歴史に関するものだった。この試験は幾分不可思議であり、というのも、手元に解答用紙だけではなく、問題の解答解説集もあり、試験の最中はそれを机の上に置きながらもそれを見ないようにして解答していく必要があった。だが、試験の問題すらも解答解説集の中にあるのだからどうしても解答が目に入ってしまう。

私は正しい解答を知りながらも、現在の自分の理解度に正直になりながら解答をしていく必要があった。実際に私は、解答が見えてしまった問題に対して、仮に自分がその答えを知っていなければ、空欄にするかあえて間違っている答えを書くようにしていた。そのように歴史の問題に全て解答すると、今度は英語のスピーキングの試験に移った。ここでも読み上げられる英語のトランスクリプトが

解答解説集の中に記載されており、それを見ないようにして問題に解答していく必要があった。途中、問題として読み上げられる英語が聞き取りにくいことがあった。音量があまりにも小さすぎたり、急に騒音が聞こえてきたりすることによって、問題で読み上げられる英語が聞き取りにくいことがあったのである。そのため、私は読み上げられる英語を何回か聞き直した。本来は一回しか聞くことができないはずなのだが、イヤホン付きの手元の再生機を使えば何回でも英語を聞くことができた。

試験結果がどのようなものであったかわからないまま夢から覚めた。夢から目覚めた瞬間は、あまり良い目覚めの感覚がなかった。ただし、真っ赤に染まる朝日を見たとき、自分の内側で目覚めを促す何か芽生えていた。今朝の始まりはそのような形だった。フローニンゲン:2018/8/2(木)07:16

No.1192: Floating Feathers

It started to drizzle in the afternoon. Even though the weather is not fine, I have a feeling as if some feathers were floating in the air. Groningen, 16:21, Thursday, 9/6/2018

2923. 三冊の共著書籍と一冊の監訳書籍:魂の繋がりと受託

一昨日、大きな偶然を経験した。それは何かというと、私の人生を大きく変えるきっかけになった書籍の監訳の話をしていただいたことである。話をいただいた書籍に出会ったのは今からもう八年以上も前のことになるが、その書籍がきっかけとなり、私は発達理論の探究に乗り出したと言っても過言ではない。以前に、私が師事をしていたオットー・ラスキー博士の書籍を翻訳したことはあったが、監訳は今回が初めての仕事である。

私は翻訳者ではないため、書籍を翻訳することをもうしないようにしようと決めていたが、監訳という形でならば是非関与させていただきたいと思い、今回の話を引き受けさせていただいた。書名はまだ明かすことができないが、貴重な洞察を持つ書籍でありながらもすでに絶版となっていたため、今回改めて世に出すことには大きな意義があると思う。

この日記でそれほど取り上げていなかったが、現在二冊ほど共著の書籍の執筆を進めている。一冊については共著者として全体の内容を監修させていただき、章末のコラムの執筆を担当させてもらっている。もう一冊の書籍も全体の内容の監修をさせていただき、昨日は本書の巻末に挿入していただく予定の対談を行った。これらの二冊とも執筆は順調に進んでおり、どちらも年内には世に

送り出せるのではないかと思っている。さらにもう一冊共著の話があり、こちらに関しては九月以降から執筆を開始するようなスケジュールになっている。そのため、現在は三冊の共著と一冊の監訳に関する仕事がある。これらの仕事についてもゆっくりと着実に進めていこうと思う。

今日はこれから作曲実践に取り掛かりたいと思う。まずは毎朝の日課である、バッハの二声のコラールに範を求めて一曲作る。厳密な流れとしては、朝の作曲実践に入る前に、必ず過去に作った二曲の編集をし、その曲を聴きながら喚起された内的感覚や内的イメージをデッサンする。それを終えてからバッハの曲を参考にする。

GRE試験に向けた単語学習がひと段落つき、単語集の四周目からは一周を回す時間も労力もそれほどかからないため、その他の活動に時間を充てることができる。今日から再び作曲実践や読書に力を入れていきたい。バッハの曲を参考にし終えたら読書を行い、昼食前にまた作曲を行う。その際にはテレマンに範を求めようと思う。

ここ数日間改めて考えていたのは、とにかくここからの数年間は過去の作曲家の作品を絶えず参考にしながら曲を作っていこうというものだった。自分の内側の感覚だけから曲を作るのはもっと後でいい。それを焦ってはならない。

すでにこの世界に存在している無数の傑作を参考にしながら、それこそ無数に曲を作っていく。その過程の中で徐々に自分なりの作曲文体が構築され、そこから少しずつ何も参照することなしに曲を作っていく。

毎日、二、三曲ほど無心になって過去の作曲家の曲に範を求めていることには何か意味があるのではないかと思えてくる。それらの作曲家との何か大切な繋がりがあるような気がしてくるのである。彼らを決して他人として思えないような何か。あえて言うならば、魂の繋がりのようなものを感じる。そして、私はまるで何かを委託されているかのように、彼らが残した無数の曲に範を求め、これから徐々に自分の曲を生み出すように日々歩みを進めている。

過去の偉大な作曲家との繋がり、そして何かを受託しながら自分が生きているような感覚を今日も持ちながら作曲実践に取り掛かる。この道は果てしなく長く、それはどこまでも続いていく。フローニンゲン:2018/8/2(木)07:46

No.1193: Cryptic Inner Senses

It is very chilly today. I can see multilayered clouds in the sky. My inner senses are more cryptic than usual. Groningen, 07:16, Friday, 9/7/2018

2924. 魂とパトスに共振する創造物

今日も本当に穏やかな時間が流れている。落ち着いた時間の流れと歩調を合わせるかのように、爽やかな風が流れていく。

八月を迎えて二日目になるが、今日もフローニンゲンは過ごしやすい気候だ。今日は久しぶりにシューベルトのピアノソナタを聴いている。合計で八時間ほどの曲集を一日中聴くことになるだろう。

早いもので、欧州での三年目の生活を迎えた。今から二年前の今日を思い出す。新たな生活が始まったことによる高揚感のようなものが当時の自分にはあったかもしれない。また、未知のものに向かっていこうとする何とも言えない気持ちも持ち合わせていただろう。

今日に至る全ての思い出がとても懐かしく思える。今日からさらに一年ほどこの地での生活を続けていく。今年一年もこの二年間に引き続き、自己の土地を豊かに耕すような経験を積み重ねていくにちがいない。

フローニンゲンのこの落ち着きには本当に感謝をする必要がある。日々の探究活動と創造活動がこれほどまでに着実に進んでいくのは、この土地の落ち着きによるところが大きい。今後は本当に単に巨大なだけの都市に住まないようにする。そこに量的な圧倒感があったとしても、質的な充実感はないだろう。とにかく私が求めているのは質的な豊かさであり、質的な充足感である。空虚な巨大都市で生活を営むことだけは何としても避けなければならない。

欧州での生活を始めてから、やはり自分は様々な変化を経験してきたのだと思う。そうした変化を生み出したものは、紛れもなく数多くの直接体験だと思う。しかもそうした直接体験が、欧州という文化の総体の中でなされたものであるということが大きな意味を持っているように思えてくる。質的に豊かなものが堆積された欧州の地で毎日呼吸をしているという実感を得ると共に、それがどれほど

自己を育ててくれているかについても思いを巡らせる。結局、自らの身と存在を投げ入れて体験を試みなければ見えないものや感じられないものがあるということ。それを身を以て知るきっかけを与えてくれているのがこの地での生活だ。

今日はこれから昼食までの時間を使って、テレマンに範を求める形で一曲作りたい。毎日様々な作曲家の曲を聴き、彼らが残した作品の楽譜を眺めていると、魂とパトスに染み渡る音楽をいかに作っていくか、そして魂とパトスの双方を揺さぶる音楽をいかに作っていくかの道について考えることを余儀なくされる。

毎日の生活の中で、言葉、音、絵の三つの表現手法を通じて創造活動を営むことが不可欠のものとなった。実際には、音楽のみならず、言葉にせよ、絵にせよ、その本質には魂やパトスと共振する何かがあるはずであるし、一人の人間の真の創造物は他者の魂やパトスと共鳴を起こすようなものだと思最近よく思う。そうした創造物を生み出すための道を探るためには、そもそも魂やパトスの性質について深く理解する必要があるのではないかと思うに至っている。その一つの道は引き続き人間発達に関する探究を進めていくことであり、意識の形而上学を含めた霊学的な探究を継続していくことにあるだろう。フローニンゲン:2018/8/2(木)11:12

No.1194: One Purple Poem

I perceived a purple curved line and several small dark blue circles. The more I observe my inner senses and images, the more I become astonished by the mysterious nature and power of human inner world. Groningen, 07:31, Friday, 9/7/2018

2925. 絵画作品からの作曲と平穏さ

今日もまた一日が終わりに向かっている。時刻は午後の六時を迎えた。この時間帯のフローニンゲンはまだ真昼のような明るさを持っている。だが時刻としては夜に入りかけていると言っても良いだろう。

夕方にかかり付けの歯医者を訪れ、半年に一度の歯のクリーニングをしてもらった。行きも帰りも日向は暑さを感じさせた。一方で、日陰に入った時の涼しさはフローニンゲンの特徴の一つだろう。こ

の時期は夏期休暇の時期だからか、歯医者さんの待合室には先週の定期検査の日と同様に、今日も人が少なかった。歯医者で顔を合わせたのは、私のクリーニングが終わる間にやってきた一人の患者だけだった。

先日の定期検査で担当の歯科医から助言があったように、これからは毎日のコーヒーの量を減らし、ブラッシングにもより気を遣いたいと思う。幸い、半年前から今回にかけて虫歯はなく、歯肉の状態も含めて極めて良好だったのだが、歯に付着した色素についてだけ忠告があった。先日以降からコーヒーの量を減らし、今ではそれがすっかり習慣となっている。

今日はこれから、先日のインタビュー記事の原稿に目を通し、必要な修正をしてからライターの方に送りたいと思う。原稿が送られてきてすぐに全体を眺めてみたところ、見事に内容がまとまっているように感じたため、修正箇所は言葉の言い回しぐらいになるだろう。原稿の修正が終わったら、夜に再度作曲実践を行う。今日は早朝にバッハに範を求めて一曲作り、昼食の前後にテレマンに範を求めて一曲作った。夜は、バッハの四声のコラールを参考にした曲を作ろうと思う。

今日も午後に、絵画作品の鑑賞から得られた内的感覚を曲にしたいという衝動が芽生えた。自己の存在を捉えて離さない絵画作品を眺めながら、作品から喚起されるものを曲にしていくようなことを近々行い始めるような予感がある。もちろん、今の技術では思うようにいかないことだらけだろう。だが、どんなにそれが未熟だと他者から思われても、自分の内側にはそうした創造衝動が芽生えている。

自分の魂と共振している画家の作品を眺めながら、喚起されるものを曲として形にしていく。同じ作品をテーマに何度も曲を作ってもいいかもしれない。仮に自分の内側が成熟の歩みを進め、作曲技術がゆっくりと進歩しているのであれば、同一の絵画作品を取り上げたとしても、そこで得られる感覚は深まっているであろうし、それによって生み出される曲にも変化が見られるだろう。

今この瞬間にも思うが、毎日が平穏な気持ちで開始され、その平穏さは一日を通して消えることがない。今朝の起床時に拝んだ朝日の輝き。それを眺めていた時の自分の心の様子。平穏な心で一日を始め、平穏な心で一日を終える。そして、一日を通して平穏な心を持っているということ。これはとても大切な生き方のように思えてくる。このような日々を送っていると、生誕も死も平穏さの中に

あるのではないかと、思えてくる。始まりも終わりも平穏であり、実はそのプロセスそのものも平穏な流れの中で営まれているのではないかと、思えて仕方ない。

始まりも終わりもプロセスも、それが荒れたように思えるのであれば、それは認識の罫に囚われている証拠かもしれない。それらは本質的には荒れることなくただそこにあるものなのだと思う。フローニンゲン:2018/8/2(木)18:17

No.1195: Autumn Noon after the Rain

It stopped raining, and I can see the beautiful autumn sky now. I'm enjoying this serene moment at noon. Groningen, 12:17, Friday, 9/7/2018

2926. 芸術教育・霊性教育・美学の探究に向けて

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を開始させた。なぜだか今日は早朝から活力に満ち溢れている。確かに私は毎朝自らの活力の存在に気づくが、いつもはより静謐な流れとしてそれを感じる。一方、今日はどこか激烈な流れとしてそれを感じている。

今日も読みに読み、書きに書き、作りに作る時間を過ごしたい。特に今日からは再び旺盛な読書を行いたい。

ここしばらくは、GRE対策の学習に時間をかけることが多く、さらにはオランダの国内旅行などもあったため、読書の時間を十分にとることができなかった。GRE試験に向けた学習に関しては山場を超えたため、ここからは毎日短い時間に集中して取り組むことにする。そのおかげで、読書に充てる十分な時間が生まれた。

今日からは兎にも角にも、芸術教育、霊性教育、美学に関する書籍を読んでいく。それらが現在の自分の最大の関心事項であり、それらに関する理解を極限まで深めていく。そして少しずつ自らの思想を育んでいきたいと思う。芸術教育、霊性教育、美学がこれほどまでに重要なものとして自分の目の前に立ち現れたことは未だかつてなかった。自己が成熟の歩みを進めるたびに新たな関心領域が開けてくる。それは、視界が開かれていくごとに新たな景色が見えてくるのと非常に似ている。

芸術教育、霊性教育、美学の三つをどのように関連付けて探究をしていくか。三つの領域はお互いが密接に関連し合っているように思える。各人固有の芸術性、霊性、美意識を一生涯にわたっていかに育んでいくか。それらは全て生誕から最後の瞬間まで発達を遂げていく。今はそうしたプロセスを理解するというよりも、それらの発達を妨げる時代の精神や仕組みの解明に関心がある。プロセスの研究は科学的な枠組みを通じてフローニンゲン大学でこの二年間集中的に取り組み、その活動から一旦離れる時期にあると今は考えている。

科学的な枠組みを通じた探究よりも、哲学的な枠組みを通じた探究を旺盛に進めていく。科学の枠組みでは自分の探究心は何ら満足しない。それだけでは魂が乾いていくばかりだ。魂の渇きを満たすためには思想がいる。哲学的な枠組みを通じた探究が不可欠なのである。

今日からは、クリシュナムルティの“Krishnamurti to Himself: His Last Journal (1993)”を読み始める。この書籍は暗示的に霊性教育や美学に通じる内容を持っている。クリシュナムルティの書籍を読み終えた後には、ここ最近関心を持ち始めているハワード・ガードナーの書籍を読み進めていきたい。ちょうど私が芸術教育や美学の探究に関心を持ち始めた時に、ガードナー教授に連絡をしたことがある。ガードナー教授は多忙であるにもかかわらず、とても丁寧に私の質問に答えてくれたことを覚えている。イギリスの書店に注文していた二冊の書籍が先日到着し、これからそれらの書籍に取り組む。一冊は、“Creating Minds: An Anatomy of Creativity Seen Through the Lives of Freud, Einstein, Picasso, Stravinsky, Eliot, Graham, and Gandhi (1993)”であり、もう一冊は“Truth, Beauty, and Goodness Reframed: Education for the Virtues in the Age of Truthiness and Twitter (2011)”である。

フローニンゲン大学での一年目のプログラムは「タレントディベロップメントと創造性」というものであり、このプログラムに在籍している時にガードナー教授の仕事に触れることがたびたびあった。確かに、成人発達理論を学び始めた頃から一貫してガードナー教授の名前を聞くことは多かったが、これまではそれほど真剣にガードナー教授の仕事と向き合ったことはなかった。

ガードナー教授の仕事に強い関心を持ち始めたのはここ数年以内のことであり、今はその関心がより強くなっている。一冊目の書籍に関しては、まさに創造性の発達というものを発達心理学の観点から解説した書籍になっている。これは芸術教育を探究するための格好の手引き書となる。もう

一冊の書籍に関しては、タイトルにあるように、「真善美」と教育哲学を関連付けた内容になっている。

芸術教育、霊性教育、美学のそれらの領域を数珠のようにつなげ、それらを一つの円とする際に、教育哲学の枠組みを活用したいと思っており、本書はその助けになるだろう。今日からの旺盛な読書を進めていくことを思うだけで、自分の内側の活力がさらに沸き立つように感じている。フローニンゲン:2018/8/3(金)07:00

No.1196: Dance of Sunset

It's six p.m. now, and my study is being exposed to the afternoon sun. Although rainclouds remain in the sky, the sunset looks like as if it were dancing with joy. Groningen, 18:02, Friday, 9/7/2018

2927. 人生という贈り物に対する返礼

フローニンゲン大学での二年目のプログラムを終え、まだ一ヶ月も経っていないのだが、再び学術的な探究を旺盛に行っていきたいという強い意欲が芽生えている。芸術教育、霊性教育、美学を教育哲学によって紐付けていくという試みに着手したいという思いが沸々と湧いてくる。当然それは独学で進めていけるものではあるが、同時にその道の学者の支援を得ながら探究をしていけば、自分だけでは到達できない深みに到達できるのではなかという思いがある。

とにかく今年一年は大学機関に所属することをせず、休暇の年とし、独学で諸々の探究を続けていくことは確かだ。だが、来年はやはり再び大学院に戻り、学び直しを行いたい。「学び直し」というよりも、私はまだ何も学んでいないのだから、再び新たに学ぶことを行いたい。

自分の内側の声を聞くと、より長期的な激しい学術探究を欲しているようだ。もしそうであれば、四つ目の修士課程に喜んで進み、博士課程にも進むかもしれない。

最近、自分は学術探究を何かへの奉仕の一環として行っているのではないか、ということを感じる。確かに学術探究は自分の関心に根を下ろして行っているものなのだが、それを自分のために行っているとはもはや呼ぶことはできなくなっている。この時代への奉仕、自分を含めた多くの存在に対す

る奉仕として学術探究を行っているのではないかと思えてきたのである。それを全うしたいという思い。それを全うするためには自己規律が不可欠であり、持続的に探究を進めていくためのコミュニティーに所属することが必要になってくるように思う。

所属する大学機関は本当に慎重に選ばなければならない。馴れ合いの組織や縛りの強い組織には決して所属しない。自分が探究を深めようと思っていることをとことん深められる大学だけに所属する。そうした大学に行き着けるような気が昨夜もしていた。また、自分でもそうした大学をこの世界から見つけ出すことを行いたい。今の私にとって最も大事であり、今後長らく探究を続けていくであろう、芸術教育、霊性教育、美学を教育哲学によって紐付けていく試みであれば博士論文を書くに値する大きなテーマだと思う。

四つ目の修士号を取得することになるかもしれないという可能性がここ最近強まっていたが、同時に博士課程の進学可能性も高まってきている。大学機関に所属して毎日少しずつ牛歩の歩みで学術研究をしていくことは、この世界に対する自分なりの奉仕なのかもしれない。

今朝方、起床してすぐにヨギティーを入れた。そのティーバッグに印象的な言葉が記されていた。それは「この人生は一つの大切な贈り物である」というものだった。この言葉は確かにありふれたものかもしれない。だが、今朝の私には大いに響くものがあった。

自己を超えた何かと繋がりながら、この世界に奉仕をするために学術研究を進めていくという人生は、自分にとって大切な一つの贈り物なのかもしれない。大切な贈り物を与えてもらった後に行うべきことはなんだろうか？それは返礼である。人生は贈り物を授かることと返礼の双方で成り立っている。

自分にとっての返礼は何だろうか？一生涯にわたって学術研究を続けていくこと、そして一生涯にわたって創造活動に従事することだ。読みに読み、書きに書き、作りに作るというのは、この人生という贈り物に対する自分なりの返礼だったのだ。フローニンゲン:2018/8/3(金)07:20

No.1197: Arrival of Autumn

When I got up this morning, I felt chilly, which told me the arrival of autumn.

Also, autumn color of leaves of street trees tell me the incoming of a new season. Groningen,
09:11, Saturday, 9/8/2018

2928. 探究衝動と創造衝動の渦の中で

読みに読み、書きに書き、作りに作るという衝動が止まらない。

書斎の窓の外を眺めると、そこには爽やかな朝の景色が広がっている。小鳥の美しい鳴き声が辺りにこだまし、書斎の中にはシューベルトのピアノソナタが響いている。自分の身体を取り巻く環境は至って爽やかで落ち着きがある。だが、私の内側は探究衝動と創造衝動で渦巻いている。それらの衝動の中に自己が溶け出してしまいそうだ。

とにかく読みたい、とにかく書きたい、とにかく作りたいという気持ち。一見するとそれは純朴な思いのように見えるが、そのような括りで語ることのできない類の思いが自分の内側に渦巻いている。

少しばかり心を落ち着けるように今日の活動内容の概要を書いていくことにする。今日はこれから過去に作った曲を編集する。過去に作った二曲を再度聴き直し、その過程で喚起された感覚をデッサンとして記録しておく。その後、バッハの二声のコラールに範を求め、時間を見てその流れで四声のコラールにも範を求めていくかもしれない。

作曲実践に区切りがいたら、クリシュナムルティの書籍を読んでいく。先ほどの日記で書き留めた書籍を読もうと思う。その書籍を読むのは今回が初めてだが、分量から推測するに今日中に一読目を終えることができそうだ。しばらく本書を読んでいると、昼食の時間がやってくるだろう。

今日は晴天に恵まれ、ランニング日和であるから、近くのノーダープラントソン公園にランニングに出かける。その帰りに行きつけのインドネシアン料理店に立ち寄り、いつもの料理を注文する。ランニングから戻ってきたら、GREの対策問題集を少しばかり進めていく。今日は読解のセクションの対策とライティングのセクションの対策を中心に行う。明日は久しぶりに数学のセクションの問題を解いておこうと思う。GRE対策の学習がひと段落つけば、そこから再びクリシュナムルティの書籍を読むことや作曲実践を並行して行いたい。それを就寝前まで続けていく。

明日以降はハワード・ガードナーの書籍を読んでいくが、ガードナーの書籍を読み終えたら、以前購入したブラヴァツキーの最重要書籍“The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy (2014)”にいよいよ取り掛かることにする。本書は二冊に分かれており、合計で1600ページほどある。購入してから少し日が空いているが、この夏の休暇に読み進めていくことにする。本書を読み終えることができたなら、以前読んだシュタイナーの書籍を再び読み返す。その際には以前よりも深い理解が得られるにちがいない。

芸術教育、霊性教育、美学に関する探究を進めていく際に、シュタイナーの思想は核になる。そうしたこともあり、ゆっくりと時間をかけてシュタイナーの思想を理解していく。

時刻は午前七時半を迎えた。一日の活動を開始させてから一時間ほどの時間が経つ。気づけばこの一時間は日記を書くことしかしていない。だが、それでいい。書くことが自分の人生を生きることなのだから。

そしてこれから作曲実践を始めるが、作ることもまた自分の人生に他ならないのである。自分が毎日行っていることは極めてシンプルであり、それは自分の人生を生きるということである。それ以外のことは自分にはできない。

今日も自らの人生を生きようと思う。その軌跡が書くことと作ることによって生み出された形として残っていく。

一日は泡沫のように儂く消えていくが、形になったものは永遠性を得る。儂くもあり永遠であるのが人生の本質のようだ。フローニンゲン:2018/8/3(金)07:40

No.1198: Autumn Ripples

Winds in the early morning that look like ripples are blowing through Groningen. The more autumn winds blow, the more street trees turn red. Groningen, 09:24, Saturday, 9/8/2018

2929. 仮眠中の現象と今朝方の夢

サンフランシスコの坂道を登り、坂道の頂上から湾を見渡すのが好きだった。

随分と前にサンフランシスコ近郊で生活をしていた日のことを懐かしく思い出した。なぜこのような記憶を思い出したのかわからない。

そういえば昨日は、エーゲ海に思いを馳せるようなことがあった。未だかつてエーゲ海を訪れたことはないのだが、自己がそこに回帰することを望んでいるかのような、そしてそこから再び歩みを始めたいと思っているかのような気が突然したのである。サンフランシスコ湾にせよ、エーゲ海にせよ、水には何か私を惹きつけるものがあるのかもしれない。

今日は雲一つない紺碧の青空が広がっている。昼食前にノーダープラントソン公園へランニングに出かけ、行きつけのインドネシア料理店に立ち寄った。今は昼食を食べ終え、先ほど仮眠から目覚めたところである。今日の仮眠中は、自分の意識がサトルからコーザルに向かう瞬間がわかった。わずか20分の仮眠の間にも、私は大抵、グロス、サトル、コーザルの三つの意識状態を行き来する。

サトルからコーザルに移行する時、そしてコーザルからサトルに移行する際には不思議な体験をすることが多い。今日の場合、コーザルからサトルに戻ってくる時に、目を閉じた世界の中で書物を読んでいた。その書物は過去に読んだものなのか、もしくは未来に読む予定のものなのかはわからない。それは英文で書かれた書物であり、自分を養ってくれるような内容が書かれており、私は食い入るように書かれている文字を目で追った。目を閉じた世界の中で私はしばらくその書物を読んでいた。そこから目覚めた時、深い睡眠を取ったのと同じような感覚が全身を包んでいたのを覚えている。今はそこから再び探究活動に取り掛かっている。

時刻は午後の四時を迎えた。この時間帯が最も気温が高くなる。確かに今の外気は30度であるが、クーラーなどは全く必要なく、日が入ってこないようにカーテンを閉め、窓を開けていれば涼しく過ごすことができる。明日からの土日は気温が下がり、最高気温は25度前後となる。夕方のこの時間帯を迎えたにもかかわらず、今朝方の夢についてふと思い出した。

夢の中で私は、以前マサチューセッツ州のレクティカでお世話になっていたセオ・ドーソン博士と再び仕事をするようになった。ドーソン博士の自宅に何人かの日本人と共にお邪魔し、そこで仕事の話をするようになっていた。ドーソン博士の家に着くと、ドーソン博士が一同をハグをしながら出迎

えてくれた。私はドーソン博士と数年ぶりの再会をそこで果たしたのだが、最後に話をした時には一悶着あった。ドーソン博士が私にもハグをしながら挨拶をしてきたが、それはどこか取り繕ったかのような行為であった。リビングに一同を集め、ドーソン博士が何やら発達理論に関する話を始めた。

ドーソン博士は説明の合間合間に、様々な質問をそこにいた他の日本人にしていた。彼らは一様にまごつきながらたどたどしい英語で回答をしている。それを見かねてドーソン博士は私にあれこれと質問をしてきた。それらの質問はどこか私を試しているかのような印象を与えたため、彼女が望む以上の回答を立て続けに述べた。するとドーソン博士は当惑した表情を一瞬浮かべ、今度は発達理論に関するものではなく、北朝鮮の政治問題に関する質問を私に投げかけた。

結局その質問も、何か明確な回答を聞きたいわけではなく、ある意味私の回答をもとにアセスメントをしたいというドーソン博士の意図が見えていた。最後の問いに対しては、急に自分の英語に揺らぎが見え、淀みなく回答を述べることに少々手間取った。

そんな夢を今朝方見ていた。夕方この時間まで夢の内容を覚えているのであるから、何か自分の中で引っかかることがあるのだろう。それが何であるかはうすうす感づいているため、それについては時間を見つけてゆっくりと向き合うことにしたい。今はそれと向き合いたくはない気分だ。フローニンゲン:2018/8/3(金)16:16

Rejoicing of Autumn

I'm rejoicing the arrival of autumn from the heart. Autumn is a symbol to deepen various phenomena both in the interior and exterior world. Groningen, 10:51, Saturday, 9/8/2018

2930. 盲目的な夢遊病者

時刻は午後の六時を迎えた。今日は読書を旺盛に進めることができた。まるで乾いた土が水を吸収するように書物を読み進めていた。早朝に紐解いた、クリシュナムルティの書籍“Krishnamurti to Himself: His Last Journal (1993)”を昼食後に読み終えた。本書から得たことは多く、その一つ一つをここでは取り上げない。ただし、一つだけ書き留めておかなければ、クリシュナムルティが指摘するように、この現代社会の日常は数かぎりない「測定」に満ち溢れており、その問題が深刻化していると

いうことだ。厳密には、無数の測定が存在していることそのものには問題ない。ここで述べている測定とは、美醜、金銭価値、能力の多寡など、様々な測定のことを指す。

私たちは日常生活を送る中で、知らず知らずのうちに、諸々の測定的判断を行っている。それは量的にも質的にもである。

これまでの日記で言及しているように、現代社会の測定はどうしても量的な評価に偏りがちである。これは大きな問題の一つであることは何度も述べているように思う。

今回クリシュナムルティの書籍を読みながら考えていたことは、現代社会が私たちに促す諸々の測定的判断は非常に限定的なものであり、それが歪められてしまっていることに問題があるのではないかということだった。

学校教育の現場や企業社会における測定的判断について考えてみると、それがいかに限定的なものであり、歪曲されたものであるかがわかるだろう。一例として挙げるならば、学校教育においては非常に限定的な評価尺度が導入されていることにより、子供たちが本来持つ多様な能力が存在しないものとして扱われ、一人一人に固有の能力を真に育む機会を喪失しているという現状である。これは企業社会における人材評価にも等しく当てはまる。アセスメントというのは確かに対象とする能力を可視化してくれるという利点を持つ。だが逆に考えれば、それは対象とする能力しか明らかにしてくれないのである。

この単純な点を理解している人は非常に少ないのではないかと最近思う。それよりもむしろ、この単純な点に気付かせないような巧妙な思想操作が大規模でなされているようにさえ思えてくる。例えば、IQなどという単一的な基準を持って人間を包括的に評価することなど本来できないはずなのだが、IQという概念がひとたび社会に普及し始めると、それによる評価が絶対的なものとなり、IQの数値があたかもその人の全人格的な評価だと錯覚してしまう風潮がかつて蔓延していた。実態としては、今もその風潮は変わらず、IQが学歴や年収という評価尺度に置き換わっているだけである。非常に浅薄な評価文化は日本だけに蔓延しているのではなく、欧米社会でもその状況はほとんど変わらないだろう。

再度要約すると、クリシュナムルティの書籍を読みながら考えさせられていたのは、私たちは日常生活のあらゆるところで様々な評価的判断を行っており、それはこの社会で生きていく上で不可避だが、評価的判断を下す基準の本質について盲目的であったり、そうした基準そのものが社会という大きな物語の中で巧妙に構築されているということに気づけないことが問題なのではないか、ということだった。結局この点も、現代人は「盲目的な夢遊病者」であるという問題意識に帰着してくる。

昨夜も就寝前にベッドの上でこの問題意識と向き合っていた。現代人は社会によって構築された様々の事柄に対して盲目であり、表面的に美しい夢を見ながら踊らされている夢遊病者であるということが、とても深刻な問題のように思えてくる。この問題に向けた取り組みを日夜模索する日々を今後も送っていきましょう。フローニンゲン:2018/8/3(金)18:24

No.1199: The Sun between the Clouds

Clouds sporadically appeared and disappeared today. I'm recollecting the warmth and brightness of the sun that broke through the clouds. Groningen, 17:25, Saturday, 9/8/2018

2931. 創造の泉に触れながら

街路樹が表情に動きをつけて微笑んでいる。夕方の爽やかな風に揺られる街路樹を見てそのように思った。

自宅の目の前の通りには青々とした街路樹が何本も植えられており、食卓からはそのうちの数本が見える。それらの街路樹が夕方の通り風に揺られる姿はどこか恍惚感を私にもたらした。印象派の絵画作品のような、どこかモネの絵のモチーフにありそうな光景が目の前に広がっていた。

ただただ毎日が充実し、幸福感を感じながら日々を生活している。何に対して充実感や幸福感を感じているかという、もしかするとそれは生きることそのものなのかもしれない。

日々を生きるということがこれほどまでに充実感と幸福感をもたらすものなのだという気づき。私はフローニンゲンの地でとても大切なことを教えてもらったように思う。この地で生活をして初めて、私は人間が人間として生きることの本質を知ったのだと思う。文章を書き、曲を作り、デッサンをしながら日々を生きる。その充実感と幸福感は何物にも代えがたい。

今朝方、過去に作った曲を聴いていると、この世界の一つ一つの存在が一つの数珠であり、それが一つの円を形成している姿が知覚された。この世界はどうやら一つの踊る数珠玉のようなのだ。知覚された心象イメージをすぐさまデッサンとして形にしておいた。ここ最近作曲をするたびごとにデッサンをしており、随分と多くのことに気づかされる。

自分のデッサンは無意識の産物であり、そこからの学びがいかに豊かなことか。そこにはこれまでの自分の全経験が含まれているように思える。全くもって無意識に色鉛筆を動かしているだけなのに、色取り取りかつ多様な形を持つ絵がそこに生み出される。デッサンをしている最中は作曲の最中以上に何かに帰依しているような感覚がある。

作曲の最中は、まだまだ私は思考を随分と働かせている。過去の作曲家が残した楽譜を分析し、そこから曲を作っているため、どうしても思考が働く余地が残ってしまう。それはもちろん悪いことではなく、卓越の道の初期は必ず意識的な実践動作が必要になるためそれは自然なことである。

ここから私は、作曲においてもデッサンと同様に無意識の層から作品を生み出せるようにしていきたい。それが実現されるのは遙か先であることを知っている。だが、遙か先のそれを今日この瞬間に文章として書き留めた瞬間に、その日は必ずやってくるだろう。なぜなら、この文章を書いているのは現在過去未来の全ての自分だからだ。そこには未来が含まれており、それが実現された自分がこの文章を書いていると考えても何らおかしいことではない。これが文章を書くことの不思議な力であり、そもそもそうした力を発動させることのできる人間の不思議な点である。

今日はこれから再びバッハの曲に範を求めて作曲をする。その際に、一度作ったメロディーラインを再活用する際に、骨格となる構造をそのまま活用しながらも、四分音符を八分音符二つに変えてみたり、逆に四分音符二つを二分音符一つに変換させてみたりするという工夫をする。それは初歩的な作曲技術だが、それをあえて意図的に行ってみる。この技術もまた作曲における一貫性と多様性という二つの根幹原理のうちの双方と関係している。

日々作曲をし、できた曲に対してデッサンをしていると、一つ一つの作品から新たに喚起させられることが非常に多いことに驚かされる。新たに得られた感覚をもとに過去の曲を編集したり、過去のデッ

サンに手を加えたりすることを毎日飽きもせず行っているが、それはどこかプルースト的な営みだと言えなくもない、ということに気づく。

私たちの内側にある創造の泉。その泉に触れる時、自分の内側から無限に何か創造されていき、それは無限増殖を始めるかのようだ。

私たちの内側に眠る創造の泉については、よりその性質を探究したいと思う。そのためには、観察と実践が不可欠だ。日々のあらゆる創造活動にこの創造の泉が関わっていることを忘れないようにしたい。夕方の風に揺れて微笑む街路樹もこうした創造の泉から生まれたものにちがいない。フローニンゲン:2018/8/3(金)19:35

No.1200: Purple Blood

It is chilly and quiet at this moment in the morning. I feel as if my purple blood were pulsating quietly. Groningen, 08:22, Sunday, 9/9/2018

2932. 静かな土曜日の朝とハイドン

今朝は普段よりも少しばかり早めに起床し、六時から一日の活動を開始した。目覚めた時にはまだ朝日が昇っておらず、フローニンゲンの日の出も少しずつ遅くなっていることに気づいた。また昨夜は、就寝時の午後10時になると、辺りが随分と暗くなっていることに気づいた。日の入りの時間がだいぶ早まったようだ。気付かぬ間に時間が流れ、フローニンゲンは着実に秋に向かいつつあるようだ。

今朝起床して驚いたのは、今日が土曜日であるということだった。長い夏期休暇に入ってからというもの、曜日の感覚がどんどん無くなっていく。それこそ毎日が土曜日と言われても全くおかしくないし、毎日が月曜日と言われてもおかしくはない。平日週末にかかわらず、私が毎日取り組むことは同じだ。今日も読みに読み、書きに書き、作りに作る一日となるだろう。それはありふれた一日であると言えそうだが、今日という一日がどれだけ貴重であることか。

早朝の静かな世界の中、どこからともなく小鳥の鳴き声が聞こえて来る。数羽の鳥たちが澄んだ青空を優雅に飛んでいる。

今日の最高気温は26度、最低気温は15度であるから過ごしやすい一日になるだろう。今日は早朝からハイドンのピアノソナタを聴いている。

ちょうど昨日、注文しておいたハイドンの二冊の楽譜が届いた。一冊はイギリスから、もう一冊はアメリカから送られてきた。届けられた楽譜の封を切り、中身を早速取り出してみた。もちろん新品の書籍にも魅力はあるが、私は誰かがかつて読んだ中古の書物を好む傾向にある。

中古の書物の良さは、そこに他人の書き込みが時折なされていることである。これを嫌う人もいるかもしれないが、私はむしろそれを好む。というのも、大抵書き込まれている内容は、自分が到底思いつかないようなことであり、新たな視点をもたらしてくれることが多いからだ。また、時折書き込まれている図や記号に関しても、自分では生み出せないようなイメージや図がそこに描かれている場合があり、それを眺めるのは面白い。中古の書籍の良さはそうしたところにある。

ハイドンの曲にも範を求めようと思ったのは、先日見たドキュメンタリーDVDの影響によるところが大きいだろう。以前からハイドンは気になる作曲家ではあったが、範を求めるまでには至っていなかった。昨夜はモーツァルトに関するドキュメンタリー作品を鑑賞しており、その中でもハイドンに関する言及があった。ハイドンのピアノ曲にどこか惹かれるものがあるのは前々から気づいていたが、それはもしかすると、そこに自然を感じさせてくれる何かがあるからかもしれない、と昨夜思った。

モーツァルトは基本的に華やかな街の中心で生活を営みながら曲を作っていた。一方、ハイドンは宮廷に仕えながらも、生活の拠点は自然がそばにあるような場所であったという。ハイドンのピアノ曲から感じられる独特の優しさや落ち着きのようなものは、ハイドン自身が自然を愛し、また自然の近くでそうした曲が作られたからなのかもしれない。

今日は届いた楽譜のうち、ピアノソナタの方ではなく、ピアノ小作品に範を求めて一曲作りたと思う。今日も自分の内側には静かなエネルギーが流れており、それは静かに自分を創作に駆り立てている。フローニンゲン:2018/8/4(土)06:34

No.1201: River of Oblivion

Our daily life might be lead in a river of oblivion.

A new day that makes us forget and recollect something came today, too. Groningen, 08:38,
Sunday, 9/9/2018

2933. 北欧旅行に向けて

昨日はクリシュナムルティの書籍を読んだ。今日は、ハワード・ガードナーの書籍“Truth, Beauty, and Goodness Reframed: Education for the Virtues in the Age of Truthiness and Twitter (2011)”を読み進めていきたい。昨日から本書を読み始めたが、これは良書であることがすぐにわかった。今の私にとって得るものが非常に多い。

ガードナーが本書の冒頭で述べているように、ガードナーにとって本書が最もパーソナルな記述が多いということも、この書籍に私が惹きつけられている理由かもしれない。本文自体は200ページほどであるから、本書は今日中に初読を終えることができるだろう。その他にもさらにもう一冊ほどガードナーの書籍が書斎の机の上に置かれている。その書籍についても近日中に初読を終えたい。

ガードナーは、芸術教育の考察を深めていく上で非常に参考になる書籍をその他にもいくつか出版している。まだ購入していないものについては近々購入しておきたいと思う。

学術探究に関しては、とにかく焦点を芸術教育・霊性教育・美学に当てていく。それらを包摂するかのように教育哲学についての探究も進めていく。この夏はそうした探究の土台が緩やかに構築されていくだろう。

今日が土曜日であるからか、辺りは本当に静かだ。今朝は風がなく、冷たい空気が辺りを包んでいる。先ほど書斎の窓際に行き、開けた窓から流れ込んでくる冷たい空気に触れていた。時刻は午前七時に近づいてきており、ようやく朝日が赤レンガの家々の屋根に当たり始めた。今日もゆつくりと始動する。

今日は夕方か夜にでも、今月末の北欧旅行の各種予約を済ませておきたいと思う。とりあえずは航空券とホテルの予約を済ませておきたい。今回の旅行については前々から大まかな計画をしていた。北欧の三カ国を訪れることを考えていた時もあり、フィンランドだけに訪れることを考えていた時

もあった。だが結局今回は、フィンランドのヘルシンキとスウェーデンのストックホルムを訪れることにした。各都市四泊五日ほどの滞在を予定しており、合計で10日間ほどの旅となる。

どちらの都市においても、訪れる場所は美術館や博物館が中心となる。ストックホルムに滞在中は、落ち着いた図書館に通い、そこで日記の執筆や作曲を進めたいと思う。ヘルシンキに関しても宿泊先の近くに図書館があるかどうかを調べてみよう。

欧州での生活も三年目を迎え、都市型の生活ではなく、自然の中での生活を徐々に希求し始めていることに気づく。その思いは日増しに緩やかに募っていく。一方で、人が集まる都市を訪れ、美術館や博物館に足を運ぶことによって、人間や文明に対する自分の考えが深まっていくことも感じているため、もうしばらくは都市へ旅行に行くことは続くだろう。だがいつの日か、この世界に存在する様々な雄大な自然の中に入っていきような旅をしていきたいと思う。目には見えないそこに存在する大きな存在に会いに行くのである。

そこにしか存在しないものとの出会いは、一方で普遍的な何かも感じさせてくれる。固有の土着神と形容していいような存在に触れることが、普遍的な何かに気づかせてくれるというのは面白い。

自然に還る日はそう遠くないのかもしれない。フローニンゲン:2018/8/4(土)06:59

No.1202: A Running Ingenuous Shadow of Death

I felt that an ingenuous shadow of death was passing through the inside of myself. It was an innocent and guileless shadow. Groningen, 10:01, Sunday, 9/9/2018

2934. 土地に根ざす作風とGRE試験対策

今日はこれからいつものように、過去に作った曲を二つほど聴き、曲を聴きながら得られた感覚をデッサンとして表現していく。その後、少しばかり編集作業をし、作曲実践へと移っていく。

毎朝の習慣として、一日の作曲実践のスタートは、バッハの二声のコラールを参考にしていく。今日も一曲ほどバッハの二声のコラールを参考にして作る。毎朝・毎晩、バッハの曲に範を求めてき

たこともあり、気づかないうちに69曲の二声のコラールのうち、47曲ほど参考に使っていたようである。着実に実践が進んでいるのを実感する。

69曲の全てを参考にしたら、その後は371曲の四声コラールについても同様に毎日参考にしていく。四つのパートを持つ曲については、二つのパートの曲よりも複雑であるから、最初は曲を作るのに時間がかかるかもしれない。そのため、一日に一つだけ四声の曲に範を求めることになるだろう。だがその後、四つのパートを持つ曲を作ることに慣れてきたら、今行っているように、朝と晩に二曲ほどバッハに範を求めて作ることも可能になってくるかもしれない。

現在、私は調性のある曲を作っている。その際に興味深いのは、やはりその時の自分の内的感覚に影響を受けて調性を選択しているということである。今の季節は日照時間も長く、生命力に溢れる夏の時期であるがゆえに、長調の曲を作ることが多いと言えるかもしれない。これから秋となり、厳しい冬へと向かっていく中で、徐々に短調の曲を作っていくことになるのではないかという予感がする。

昨日にモーツァルトのドキュメンタリーDVDを見て思ったが、やはり作曲家がどのような土地に生活し、どのような土地で活動を営んでいるのかは、その作曲家の作品に多大な影響を与えるようだ。その人なりの作風というのは、まさにその人の個性から育まれるものであると同時に、その人がどのような環境に身を置いているかによっても左右されることがわかってくる。

バッハの曲に範を求めた後に、昼食の前後にはハイドンの曲を参考にまた一曲作りたいと思う。

今月末の北欧旅行が近づいてくるのと同時に、その前に受験するGRE試験も徐々に迫ってきている。今日はその対策にも時間を充てたいと思う。受験するGRE試験は基本的にはコンピューター上で行われる。おそらくペーパー上のもう受験できないか、もしくはとても限られた試験会場でしか受験できないのではないかと思う。

今日は読解のセクションに絞って対策を進める。実際の読解セクションは20問30分という構成であるが、手元にあるETS出版の対策問題集はペーパー上の試験の構成を依然として踏襲しており、25問35分と表記している。GRE試験の英文は難解であり、それを短い時間の中で深く理解することが要求される。とにかく時間に追われるのが読解セクションであり、今日からは時間制限を意識して25

間で構成される問題を1セット解く。それを午前中に行い、午後に解答解説を読んでいくことにする。昨日も少しばかり対策問題を解いていたが、自分が間違えてしまう問題のパターンが随分と見えてきた。それは四年前とさほど変わらなく、自分の思考の癖のようなものが抜け切れていないように思えるが、それを矯正していくように学習を進めていく。

自分がどのような理由から誤った解答を選んできたのかを自分で説明できるようにしていく。これは非常にシンプルな実践だが、それを間違えた問題の全てに対して丁寧に行っていく。

ライティングに関して実際に文章を書いていく訓練は、試験10日前から集中的に取り組みたいと思う。それまでは対策問題集の解答例を音読し、高い評価を得ている解答の質感を掴んでいく。またそれと合わせて、二問から構成されるライティングの問題に関する評価項目を熟知していく。そのようなことを今日から少しずつ行っていきたい。フローニンゲン:2018/8/4(土)07:26

No.1203: A Cold Wind

I feel that a season of wintry blast is approaching gradually. A Sunday in autumn is now passing by. Groningen, 16:50, Sunday, 9/9/2018

2935. ハワード・ガードナー教授の書籍から

穏やかな土曜日も夕食の時間に近づいてきている。時刻は午後の五時を回ったところである。

今日も一日中、書斎の窓から広がる景色を眺めながら探究活動と創造活動に従事していた。たった今、Howard Gardnerの“Truth, Beauty, and Goodness Reframed: Education for the Virtues in the Age of Truthiness and Twitter (2011)”を読み進めた。この書籍を読みながら、自分なりに真善美の探究を本格的に行っていこうという気持ちを新たにしたい。とりわけ今の私にとっては、美の探究が何よりも重要である。

ガードナーの仕事について興味を持ち、彼自身についてあれこれ調べてみると、ガードナーは学生の頃から十年間ほどピアノを教えていたそうである。ガードナーは幼少の頃からピアノ演奏に親しんでいたが、プロのピアニストになることはせず、その代わりにピアノの演奏を教えていた時期があるとは知らなかった。道理で本書の中にある音楽的な記述が表面的なものにとどまらないわけで

ある。ガードナーがピアノに親しんでいたということ、そして学術的なキャリアを美学の探究から開始させたことに共感の念を持った。

その後のガードナーのキャリアについては言うまでもなく、発達心理学と認知心理学を通じた真の探究、そして「善き仕事とは」「善き市民とは」というテーマを軸に善の探究を行ってきたことはよく知られていることだろう。

本書のタイトルにあるように、本書はまさに真善美の探究を長らく行ってきたガードナーの集大成が一般書として見事にまとめられている。そんなガードナーも今年で75歳を迎えた。去年の年末に、ガードナー教授と何回かメールのやり取りをさせていただいた時に、多忙であるにもかかわらず、私の関心に対して明確な方向性を与えてくれたことに感謝しなければならない。

あの時も、また大きなプロジェクトを手がけている最中だということを述べていたガードナー教授であるが、私のような駆け出しの研究者にも親身になってメールをくださったことには改めて感謝の念が生まれてくる。ちょうど今年の秋にボストンを訪れる機会があるため、その際にガードナー教授のスケジュールが合えば、短い時間でもいいので面会をし、直接会ってお礼を述べたいと思う。

明日からはガードナー教授の“Creating Minds: An Anatomy of Creativity Seen Through the Lives of Freud, Einstein, Picasso, Stravinsky, Eliot, Graham, and Gandhi (1993)”を少しずつ読み進めていきたい。昨日の日記にも書き留めていたが、芸術教育に関するガードナー教授の書籍は残らず全て購入し、全てに一度目を通しておこうと思う。ガードナー教授の仕事が自分に近づいてきたことを嬉しく思う。

ガードナー教授に影響を与えた人物を眺めてみると、心理学者においてはジャン・ピアジェ、ジェローム・ブルーナー、エリク・エリクソンが並ぶ。また、本日読んだ書籍の中でもたびたび言及があったが、ガードナー教授は哲学者ではネルソン・グッドマンに師事を知った。ガードナー教授の一連の仕事それらの学者からの影響と紐付けて考えてみると、また色々なことが見えてくる。本日読んだ書籍の内容は、そうした学者との交流に着想を得ており、ガードナー教授自身の思想の発達も彼らの仕事から多大な影響を受けていることがわかる。ここからも、一人の学者の仕事がどれだけ過去の他の学者の仕事の上に成り立っているかがわかる。ガードナー教授に綿々と引き継が

れたものがまた新しい世代の学者に引き継がれていく。おそらく私もその一人になるだろう。フロンゲン:2018/8/4(土)17:38

No.1204: Last Words

“What were the person’s last words?” “What will be my last words?” I was thinking about them. Our life may be a journey from the first word to the last ones. Groningen, 08:57, Monday, 9/10/2018

2936. 奉仕のための読書と部分と全体としての作品

今日は読書と作曲実践に多くの時間を充てるような土曜日であった。本日読書をしながら考えていたのは、書物を読むことそのものも実は自分に課せられた一つの重要な仕事なのではないか、ということだった。もちろん、基本的に全ての読書は自らの知的関心に赴くままに進められているが、どうも最近は、そうした読書を自らの知的好奇心を満たすためだけに行っているとは思えないのだ。それはどこか、何かに奉仕するために行っている行為に思えてくる。

読書によって自己を深め、それによってこの社会により深く関与することが可能になるという点において、読書の持つ意味は私にとって大きい。以前からの変化としては、今は読むことよりも書くことや作曲をより重視している。だが、読むことに関しても、それがこの世界に対する奉仕につながるのであれば、今後も一つの大切な仕事として継続させていく必要がある、という考えを持つに至った。仮にこれからより一層文章を書くことと曲を作ることに専心し始めたとしても、読書をすることは一つの大切な仕事として継続させていきたい。

今日は夕方に、イギリスの書店から、先日注文していたハイドンのピアノソナタの楽譜の上巻が届いた。下巻についてはすでに昨日届いていたので、これを持ってハイドンの全てのピアノソナタに関する楽譜が手に入ったことになる。

先ほどパラパラと上巻を眺めてみた。とても学びの多そうな楽譜であるということが一目瞭然であった。

午後に一度、ピアノソナタではなく他のピアノ作品に範を求めて曲を作ったが、近々ハイドンのピアノソナタにも積極的に範を求めていこうと思う。日々作る一つ一つの曲は、一生涯を通じて生み出す一つの巨大な曲の大切な部分になる。

一つの曲はそれとしては完結しているが、実はそれが他の曲と有機的なつながりがあることに疑いはない。一つの創造物は他の創造物と深いつながりがあり、それらは独立していながらも互いに影響を与え合っているのである。

今日はこれからバッハの四声のコラールに範を求めて一曲作る。それもまた、一つの小さな曲であることは確かだが、全体から見ればそれは一つのかげがえのない部分だと言える。

一つ一つの作品は、生涯にわたって生み出される一つの巨大な曲の大切な部分であるということ。一つ一つの曲が固有の生命を持っており、それが相互に影響を与え合う形で一つの巨大な生命を生み出していくということ。それを忘れないように今日のこれからの作曲に従事したいと思う。フローニンゲン:2018/8/4(土)17:53

No.1205: After the Morning Sun

The sky becomes covered with clouds at this moment, although I could see the morning sun half an hour ago. I'll engage in my life work also today to let it go forward at a slow pace. Groningen, 09:12, Monday, 9/10/2018

2937. 北欧旅行の順路と新たな生活リズム

今朝は五時あたりに一度目を覚まし、そこから再び一時間ほど眠ることにした。五時あたりに目を覚ました時には辺りはとても薄暗かったが、六時に目を覚ました時にはすでに辺りに明るさがもたらされていた。

六時半を迎えた今は、すっかり朝日が昇り、赤レンガの家々の屋根を明るく照らしている。早朝はいつも風が穏やかである。今朝はほとんど風がないと言ってもいいだろう。ただし、開けた書斎の窓からは冷たい空気が流れ込んでくる。開けた窓の方に近寄ってみると、この時間帯の外の気温は相当地に低いことがわかる。

八月を迎えたばかりだが、今の外気は12度ぐらいである。今日はとりわけ気温が低い。明日と明後日はまた最高気温が30度前後となるようであり、暑さが戻るが、今週末からは最高気温が20度前半の日々が続くらしい。秋が着実にやってくるのがわかる。

秋がやってくる前に、この夏は北欧に旅行に出かける。北欧に足を運ぶのは二年連続である。昨年の夏はデンマークとノルウェーを訪れた。今年の夏はスウェーデンとフィンランドである。

そろそろ飛行機とホテルの予約をしておいた方がいいだろう。予定では昨日にそれを済ませようと思っていたのだがそれができなかった。そのため、今夜は夕食後に時間を取り、各種の予約を済ませることにしたい。旅行の順路に関してはまだ決めておらず、オランダから近いスウェーデンに先に訪れるのがいいのか、遠いフィンランドに先に訪れるのがいいのか迷うところである。オランダから徐々に北欧世界に入っていくということを考えるのであれば、先にスウェーデンに行った方がいいかもしれない。

計画としては最初にストックホルムに滞在し、その後ヘルシンキに滞在したいと思う。飛行機やホテルの予約状況を確認して最終的な判断を行うが、今のところはまずストックホルムに先に訪れることにする。

今朝方は印象的に残る夢を見ていた。だが、今日はその内容についてはあえて書き留めないようにする。昨日は十時を迎えたあたりに寝室に向かった。今日からはもう少し早く就寝してもいいかもしれない。毎晩就寝を迎える頃には、それ以上何か文章を読む気力や文章を書く気力は残っておらず、作曲をする気力も残っていない。

いつも気付かぬうちに探究活動や創造活動に最大限従事しすぎてしまっている自分がいるようだ。今日からの新たな習慣として、その日の探究活動や創造活動がひと段落したら、そこから継続して何かをするのではなく、速やかに就寝し、次の日の探究と創造に備えるという生活リズムを確立したい。ついつい夜は不要な調べ物をインターネットを活用して行いがちであり、それを気晴らしにするのではなく、速やかに就寝する。睡眠以上に気晴らしになるものではなく、それは気晴らしというよりもむしろ、気力を充実させてくれるものだ。とにかく早寝早起きを心がけ、十分な睡眠を確保すること。そして起床直後の朝の時間は、創造活動に時間を十分に充てることを再度ここで確認したい。

夏期休暇はまだ続くため、新たな生活リズムを構築し、絶えず十分な気力で日々の探究活動と創造活動を前に進めていく。フローニンゲン:2018/8/5(日)07:03

No.1206: Fragments of Dance

I have a feeling as if fragments of dance remained inside my body. In such a condition, it will be wise to do things slowly. Groningen, 10:16, Monday, 9/10/2018

2938. 元気な子供とGRE試験の問題からわかる思考の癖

小鳥たちの鳴き声がとても美しく辺りに響いている。開けられた書斎の窓から、そして寝室の窓からも小鳥たちの鳴き声が聞こえて来る。

今私は、両方の窓から入ってくる小鳥の鳴き声に挟まれる形でこの日記を書いている。二つの方向から聞こえて来る鳴き声は、どこか共鳴し合っているように思えてくる。それは調和の取れた二声のコラールのようにであり、協奏曲的と言ってもいいかもしれない。

先ほど書斎の窓の方向に歩み寄っていき、そこでひんやりとした空気に触れていた。すると、隣の住人の子供が元気一杯に何かを話している声が聞こえてきた。その時の時刻はまだ六時半ぐらいだったのだが、その子は随分と早く起床しているのだなと感心した。今住んでいる家の両隣の家にはどちらも小さな子供がいる。

以前の日記で書き留めたように、部屋の呼び鈴の音が心地良くないため、呼び鈴がならないように設定しているという都合上、郵便受けに入らない大きさの荷物はいつも両隣のどちらかの家に預かってもらうことになっている。郵便受けに入った不在通知を見て、どちらの家に預けられているのかを確認し、いつもどちらかの家に伺うのだが、荷物を受け取りに行くと時々小さな子供が父親か母親にくっついて顔を出すことがある。両隣の子供はまだ小さく、とても可愛い。

右の家の女の子は二、三歳ぐらいであり、言葉をしゃべるようだ。一方、左の家の男の子はまだ一歳になったばかりの年齢であり、話すことはまだできないと先日その子の父親から聞いた。今朝はしゃいでいたのはその男の子の方だ。子供たちの元気な様子を見ると、いつも活力を得られるような気がしている。子供というのは不思議な存在だ。

今日はこれから早朝の作曲実践を行う。今日もバッハとハイドンを中心に作曲を行う。その後、GRE試験の対策を進めていく。昨日と同様に、英文読解のセクションの問題を1セットほど解きたいと思う。昨日、時間制限を設けて問題を解いてみたところ、まだ試験の問題に体を慣らしていない今ですら、四年前よりも問題が比較的速やかに解けるようになっていた。ただし、時間に関しては制限時間ギリギリで解き終えることになった。だが四年前と違うのは、四年前は絶えず時間に追われ、常に焦りの感情を持ちながら問題を解かざるを得ない状況に置かれた上で制限時間内になんとか問題が解き終わるといような状態だったが、今はそうではない。

問題の最初から最後まで比較的落ち着きを持っており、ゆとりを持って冷静に問題を解いた結果として制限時間ギリギリで問題が解き終わっているという状態だ。もちろん、ここからさらにタイムマネジメントの感覚を磨いていく必要があるが、試験問題に体を慣らしていく最初のこの段階ですら、四年前よりも問題が解けるようになっている自分がいることは朗報である。制限時間内に問題を解ける目処は立っているが、正解率の方はどうだろうか。これについては四年前とあまり変わっておらず、若干微増の70%ぐらいであった。

GREは各セクションの問題数がそれほど多くないため、一問に重みがある。昨日、数問ほど回答に悩むものがあり、最後まで残った二つの選択肢のうち、反対側が正解だったという問題が何問もあった。そうした問題を取りこぼさずに正解することができたら80%ぐらいまで正解率を高めることができるだろう。間違える問題についてはもうパターンを掴み始めている。

GREの読解セクションの対策をしていて面白いのは、間違えた問題から読解に関する自分の思考の癖に気づくことだ。こうした思考の癖を次々に明確にしていき、そうした癖に囚われることが減っていけば、正解率は向上していけると期待する。

今日の問題を解く際には、昨日に気づいた思考の癖を意識し、問題を解き終えた後には新たな思考の癖がないかどうかを確認し、これまでの思考の癖がどれほど改善されているかを確認したいと思う。GRE試験に向けた学習を、単なる試験の対策だと捉えるのではなく、自己発見をもたらすような学習の場としたい。フローニンゲン:2018/8/5(日)07:28

I can see red brick houses from the window of my study. Closing my eyes, I notice that those houses begin a procession. Groningen, 15:03, Monday, 9/10/2018

2939. GRE試験対策:日本語の介在度合い

今日の午前中にはGREの読解セクションの問題を1セットほど解こうと思っている。四年前まではGRE試験で出題される英文が非常に難解で、文意を掴むのにいつも苦勞していたが、今はそれほどでもない。やはりフローニンゲン大学に来て、二年間ほど学術的な専門書や論文を読み続けていたことが大きいように思う。また、この二年間で二つの修士論文を書いたことも大きな要因として挙げられそうだ。

今から七年前に米国に渡った翌年に、当時は博士課程への進学を考えていたため、GREを何度か受けた。それは今から六年前のことであり、その時は本当にGRE試験の問題が難しいと感じた。今から四年前に再度受験した時も難解だという印象はやはり変わらなかった。ところが今は、その印象が随分と薄れている。それはやはり、この四年間において、自分が着実な歩みを進めていたからだろう。

昨日、1セットほど読解のセクションの問題を解いた後に考えていたことがある。私は普段、英文を読む際には英文のまま理解するようにしている。つまり、日本語に翻訳しながら読むのではなく、英文を英文として理解していくように読んでいる。これは七年前に米国に渡って以降に完全な習慣的行為になった。そうした習慣はTOEFLやGREの試験に関しても当てはまる。

昨日は、読解セクションの問題をいつものように英文のままに理解して問題を解いていた。しかし、そこでふと思ったのは、文意を把握するのが厄介なGREの問題に関してはあえて日本語に訳してもいいのではないかと思った。もちろん、全ての問題を日本語に訳しながら解いていると時間が全くもって足りない。GREの問題の中には論理パズルのような問題があり、そうした問題に関しては日本語脳を活性化させ、日本語を媒介させた方が問題が解きやすいのではないかと思った。

結局それは、七年間も英語空間の中で精神生活をしていたとしても、細かな思考を司ることに關してはやはり依然として母国語の方が力を持っていることを暗に示している。そうしたことから、今日の午前中に1セット問題を解く際には、論理パズルのような問題や、文意が速やかに把握できないような箇所については日本語を介在させていこうと思う。

基本的に大部分の問題は英文のまま解答していくことになるだろうが、日本語を介在させることも許容してみる。今日はそれを試してみて、英文を英文のまま理解して問題を解く時と、日本語を介在させた時に解答にかかる時間と正解率を比較してみようと思う。もちろん、問題の難易度が異なれば比較にならないが、対策問題集の問題は難易度にばらつきがそれほどないように作られているように思える。仮に難易度にばらつきがあれば、自分の中の感覚に問いかけてみて、どちらの方法で問題を解くのがいいのかを掴んでいく。今日はその点を意識する。

読解セクションのみならず、今日はライティングセクションについても対策を進めていく。本格的に問題に対して文章を書いていくのはまだ先であり、今は対策問題集に掲載されている高評価の文章の質感を掴むべく、それを音読することに時間を充てている。また、それに合わせて、解説集の中に記述のある採点基準を丁寧に読んでいく。今日からまた単語力の強化を再開させ、それを試験当日まで地道に続けていく。やはり試験までは単語の学習は毎日行った方がいいようだ。とにかく単語は繰り返しがものを言うため、毎日反復学習を行っていく。

GREには数学のセクションもあるが、それは六年前からすでに最高得点に近いところに到達しているため、今回の試験に向けても感覚を取り戻す程度に問題を解き、それを一つの気晴らしにしたい。
フローニンゲン:2018/8/5(日)07:58

2940. GREの読解セクションの解法について

今日は早朝から涼しい気温が続いている。早朝は涼しいというよりも寒いぐらいであった。窓を開けていると寒くなってきたので、午前中のしばらくは窓を閉めていた。今は再び窓を開け、爽やかな空気を部屋に取り入れながら書斎で過ごしている。

今日は夏とは思えないほどの涼しさである。明日と明後日は再び夏らしさを感じさせてくれるようだが、今週末からは今日と同じような気温の日々が続くらしい。

夏雲がゆるやかに大空を行進している。ゆっくりとだが着実に進行していく雲の様子をぼんやりと眺める。

今朝方、過去に作った曲を聴いていると、自然神秘主義的な自分の傾向が相まってか、森の神様について思いを馳せ、そうした存在が自分の近くにいるような気がした。

私は本当に自然との深いつながりを感じ、自然から絶えず何かを享受しているような感覚がする。森の神様について思いを馳せていると、今年の夏に訪れたノルウェーの森の光景が臉に蘇ってきた。それは今でも忘れることができない。今年も北欧を訪れる予定であり、それはもしかすると私が森の神様に呼ばれているからかもしれない。今年の夏も自然豊かな北欧に行き、そこでまた何かときっと出会うだろう。

先ほど、GREの読解セクションの問題を1セットほど解いた。今日も昨日と同じような出来であり、良くも悪くも点数が安定している。昨日と今日のスコアの合計点から換算すると、159か160点に換算されるようだ。読解のセクションで170点中160点に到達すれば御の字であり、それが今回の目標点であるため、今日の結果に対して悲観的になる必要はない。むしろ、昨日から試験に向けて感覚を慣らし始めたばかりであるから、現段階で目標点付近を獲得していることは喜ぶべきことかもしれない。

もちろん、本番の結果と模擬試験の結果は異なるものであるが、これまでの経験上、模擬試験の結果はほぼ本番の結果と酷似している。GREの試験を作っているETSが提供する模擬試験を解いているのだからそれはそうかもしれない。これまで頭を悩まされ続けていたGREの読解セクションに関して、目標点が現実的なものになってきたことを嬉しく思う。

今日解いた問題の答え合せをしている時に、また新たな重要な点に気付いた。GREの読解セクションには正解率が30%を下回るような難問があり、それを非ネイティブの自分が懸命になって正解しようとしてはならない。それは速やかに捨てる覚悟が必要だ。一方で、正解率が60%を超える問題については必ず正解する必要がある。捨てる問題の見極めをすることが鍵になってくる。

ここで気づいたのは、捨てる問題がやってくると、いつも同じことをしている自分がいるということである。それは問題文を三回以上読み直すことだ。難問の類は文意を正確に把握するのが難しい構造

になっており、文章を何度も読み返して文意を正確に理解しようとする、他の問題に解答する時間がなくなってしまう。その結果として、本来正解すべき正答率が60%を超える問題に落ちていて取り組むことができなくなってしまう。

この悪循環を断ち切るためには、二読してもすぐに文意の掴めないものは難問の類だと割り切り、その問題に正解すれば運が良かったと思う程度にとどめ、ほぼ捨てる覚悟でそうした問題をさらりと通り過ぎていくのが賢明だ。この点については、明日以降に模擬試験の問題を解く際に特に意識したいと思う。

どのような試験でもそうだが、基本的に満点を取るようなつもりで試験に臨んではならない。それもGREのように、英語がネイティブで英語圏で学士号を取得している者を対象にした試験であればなおさらさだ。難問を捨て、その代わりに正解率が高い問題を落とすことなく正解していけば、160点を超えることも不可能ではない。フローニンゲン:2018/8/5(日)12:11